

## 盲学校と視覚障害当事者団体による家族支援活動の効果

－保護者及び盲学校教員への調査から－

奈良 里 紗 (視覚障がい者ライフサポート機構 “viwa”・筑波大学大学院人間総合科学研究科)  
相 羽 大 輔 (愛知教育大学障害児教育講座)  
加 藤 芳 子 (愛知県立名古屋盲学校)  
上 杉 相 良 (愛知県立名古屋盲学校)  
岩 池 優 希 (視覚障がい者ライフサポート機構 “viwa”)

**要約** 盲学校と当事者団体が連携して行った活動が参加した家族及び盲学校教員に及ぼす効果を検討することを目的に実施した。参加した15家族に対して質問紙調査を実施した結果、11家族15名から回答が得られ、成人した視覚障害当事者からの話題提供への満足度は高く、活動の効果が確認された。また、盲学校教員5名に対して面接調査を行った結果、話題提供による効果は認められた一方で、当事者団体との連携や活動日について課題が指摘された。

**キーワード**：盲学校、センター的機能、連携、当事者団体

### I. 問題と目的

平成19 (2007) 年度から開始された特別支援教育において各特別支援学校は地域におけるセンター的機能を果たすことが規定され (文部科学省, 2005), より一層の支援の充実が求められている。視覚特別支援学校 (以下, 盲学校と示す) においても, センター的機能の充実に向けた取り組みが行われている。例えば, 沖本 (2010) は平成20年 (2008) より盲学校に在籍していない地域の視覚障害乳幼児支援を行い, その結果, 盲学校幼稚部の在籍者数が増加したことを報告している。遠藤 (2003) では, 盲学校としてのセンター的機能の取り組みとして, ①学校公開, ②盲学校以外の学校との連携 (視覚情報交換会の実施), ③視覚障害児・者に対する教育相談, ④ボランティアに対する支援, ⑤通級による指導, ⑥巡回及び訪問指導, ⑦小・中・高校での理解啓発授業を挙げており, このような役割を果たすためには, 医療・教育・福祉等の関係機関との連携や専門性の維持・向上のための研修の場が必要であることを指摘している。盲学校と他機関との連携については, 鈴木・植松・大野・白倉・中村・酒井 (2000) が, 眼科や小児科と連携を行ったことにより視覚障害乳幼児からの相談が増加したことや地域の学校のみではなく他障害の特別支援学校に対して視覚的な支援を行うという形で外部との連携を深めていることを報告している。しかし, 外部機関との連携として視覚障害当事者団体は入っておらず, 外部機関との連携とは専門機関同士の連携を示していることが多いようである。同じ境遇にある当事者同士の関わりは心理的な側面での効果があると指摘されている (高瀬・吉田, 2006; Golembiewski & Moisey, 1900) が, 盲学校における地域支援の取り組みの中に当事者団体と組織的に連携をしている報告はみられない。

ところで, 愛知県の盲学校2校は, 2015年文部科学省委嘱による「特別支援学校機能強化モデル事業」の成果に基づき, 盲学校の組織改編及びセンター的機能の充実を図ってきた。その上で, 2016年4月より, 地域の小・中学校で学ぶ視覚障害児に対して通級による指導を試行的に実施し, センター的機能の充実とともに, 就学前の視覚障害乳幼児に対する支援については, 当事者団体である視覚障がい者ライフサポート機構 “viwa” (以下, viwaと示す) と連携をしながらセンター的機能の充実を図る取り組みを始めることとなった。具体的には, viwaが視覚障害児のいる家族支援として行っているパパママ会の活動 (奈良・佐藤・岩池・加藤・上杉, 2016) を盲学校教員と連携して行うこととした。活動は1ヶ月に1回程度, 母親だけではなく父親や祖父母等家族全員が参加できるよう開催日時は土曜日に設定した。活動の長さは2時間で, 参加した家族が相談したいことを相談したり, 聞きたい話をしっかり聞いたりするための環境整備として, 希望者は託児スペースに子どもを預けられるようにした。その際, 障害のない兄弟の託児も受け入れることで家族全員が参加できるよう配慮した。相談部屋では, 毎回, テーマを設定し成人した視覚障害当事者が自分の経験談を話題提供する形とした。また, 話題提供者が盲学校近隣に居住していない場合, 通話アプリを用いて遠隔地にいる当事者とつなぎ, 映像をプロジェクタで投影する形で実施した。さらに, パパママ会終了後, 盲学校教員による事後相談会を実施し, 当事者団体から盲学校へ参加者の相談をつなぐ体制をとっている。

以上のような取り組みを実施して半年が経過したところで, 参加した家族及び盲学校教員への効果を検討する調査を行った。特に, 盲学校と当事者団体が連携して取り組みを行うことの効果は何か, また, 今後の

改善点を明らかにすることを本研究の目的とした。

## II. 方法

### 1. 既参加者への質問紙調査

#### (1) 参加者及び調査手続き

活動が既参加者へ及ぼす効果を検討するため質問紙調査を実施した。質問紙は既参加者15家族に2016年11月にメールで配布し、11家族15人(母親11名, 父親3名, 祖父母1名)から回答が得られた。

#### (2) 調査内容

個人属性として、族柄、眼疾名、年齢、視力、視野、障害者手帳の有無、在籍環境、盲学校から自宅までの所要時間及び交通費、託児サービス実施の必要性の有無を尋ねた。また、盲学校の利用状況として、パパママ会終了後の盲学校教員が実施する事後相談利用状況及び相談内容、パパママ会以外に盲学校による支援を希望するか否か、希望する場合は希望頻度について尋ねた。最後に、参加したことのある活動への満足度とその理由・感想、パパママ会のよいところ、今後取り上げてほしい内容について回答を求めた。

#### (3) 分析方法

基本属性及び満足度、取り上げてほしいテーマの順位は集計表にまとめ、自由記述の一部を抜粋した。

### 2. 盲学校教員に対する面接調査

#### (1) 参加者及び手続き

活動が盲学校教員へ及ぼす効果について検討するため、活動に参加した教員5名に対して半構造化面接を行った。参加者のうち、盲学校での教員歴10年未満が2名、10年以上が3名であった。面接時間はおおよそ60分で、録音の承諾を得てICレコーダーに記録した。

#### (2) 調査内容

面接調査では、①パパママ会の活動で印象に残っている話題提供、②印象に残っている出来事について、③盲学校と当事者団体が連携を継続する上で重要であると考えることについて、④土曜日に活動を実施することについて、及び、⑤盲学校勤務年数を尋ねた。

#### (3) 分析方法

回答内容を要約し、回答が重複している内容は件数を示した。

## III. 結果と考察

### 1. 活動が参加者へ及ぼす効果

#### (1) 参加者プロフィール

質問紙への回答が得られた11家族(12名)のプロフィールをTable1に示した。

眼疾患については、ピーターズ奇形、小眼球症、眼白子症、緑内障等と診断を受けており、視力についても測定できている者がほとんどであった。

視野の状態については、視野検査をして測定した経

験がないと回答した者が9名であった。この9名のうち、3名が6歳以上であった。また、視野の状態が分からない状況で単眼鏡等の視覚補助具を利用している事例もあった。

障害者手帳の保有状況については、有7名、無5名で、無と回答した者のうち、3名は視力が光覚あり〜0.02であった。井上・鶴岡・堀・井上(2014)が眼科病院で行った身体障害者手帳の申請が多い眼疾患は緑内障、網膜色素変性症、黄斑変性症、糖尿病網膜症となっており、年代も60代以上の症例が多いことから、小児に対する身体障害者手帳の申請事例は少ないことが考えられる。井上ら(2014)が実施した調査では、年間237例が眼科を受診していることに対して、小児のロービジョンケアでは、江口・杉谷・相馬・筑田(2014)が約10年間で受診した15歳以下の小児は87例で、そのうち、教育相談を要した症例は16例であったと報告している。本活動における参加者の障害者手帳の保有状況や視野検査の実施状況が把握できたため、今後は眼科とも連携をする必要性が示唆された。

参加者の年齢は、就学前乳幼児10名、小学生2名であり、乳幼児期からの支援ニーズが高いという先行研究(Dote Kwan, 1995; 神田, 1999)とパパママ会に参加する子どもの年齢層が一致していた。

参加者の在籍環境は、在宅7名、盲学校2名、幼稚園2名、地域の小学校1名と多様であった。これも土曜日という休業日に実施することのメリットの一つと考えられる。

自宅から盲学校までの所要時間については、30分以内1名、60分以内8名、90分以内2名、120分以上が1名であり、交通費については、500円以下5名、1,000円以下4名、1,500円以内3名となっていた。遠隔地に居住する視覚障害児への支援は全国各地の盲学校で課題として指摘されている(外山, 2000)が、120分以上かけて活動へ参加している家族もいることから、遠隔地居住者への支援方法も検討課題と言える。さらに、必要経費を賄うため参加費1,000円を集金しているが、活動場所への交通費と合わせると参加家族の経済的負担が大きくなっていることも、参加しやすい環境整備に向けての課題の一つとして考える必要があるだろう。

託児サービスの必要性については、11家族全員が必要と回答していた。障害児を育てる母親に関する文献研究(伊藤, 2010)によれば、託児施設や託児サービスの提供は必要性が高いことが指摘されており、活動に参加している家族も同様のニーズを有することが示唆された。

#### (2) 盲学校への相談状況について

視覚障害教育全般、視覚発達に関する相談、視覚補助具に関する相談等、viwaが当事者団体として応じることができない内容が多く寄せられるため、9月の

パパママ会より活動終了後に盲学校教員による事後相談会を設定した。この事後相談の利用状況について尋ねたところ、利用したことがある8名、まだ利用したことはないが今後利用したいと考えている5名、利用していない2名となっており、このうち、利用していないの2名は盲学校在籍児であるため、全員が利用経験がある、もしくは、今後利用したいと考えていることが示された。また、個別相談として盲学校教員へ相談したい内容を尋ねたところ、就学や進路について、視覚障害児の発達について、盲学校と地域の学校の授業内容の違いについて等が挙げられていた。

次に、パパママ会以外の場で盲学校に定期的な支援希望があるか尋ねたところ、盲学校在籍児を除いた全員が支援を希望すると回答していた。また、盲学校の支援希望頻度については、1ヶ月に1回程度を希望する者が9名で最も多く、次いで、1ヶ月に2回程度3名、2～3ヶ月に1回程度1名となっていた。パパママ会に参加している家族には、名古屋盲学校学区の家族と岡崎盲学校学区の家族がおり、学区の異なる家族同士が交流することで、愛知県にある2校の盲学校それぞれの学校の現状を知る機会となった。それぞれの盲学校のおかれた地域性、学校規模、伝統等により支援体制の違いはあるが、今後は2校の連携を深めることで、さらに充実した支援が可能になることが考えられる。

### (3) 各話題提供に対する満足度

各回の話題提供に対する満足度についてみると、最も満足度が得られた活動は個別相談会であり、障がいへの伝え方に関するお話、親の関わり方に関するお話という順に満足度が高かった (Table2)。個別相談会については、グループ活動を主体とするパパママ会の中でも個別に相談に乗って欲しいというニーズがあったため、8月と9月に限り急遽実施した。これらは個別形式であるため、各自が有するニーズに応じることができ、満足度が高くなったと推察できる。

一方、自由記述形式で尋ねた各回の満足度の理由 (感想を含む) の代表意見を月ごとにまとめたところ、6月の話題提供に対しては、「目が見えなくても、生き生きと、やりたい事にチャレンジしている姿がとても素敵でした。障害があっても何でもできるんだ!と思え、娘にも何にでもチャレンジさせてあげようと思いました」や「視覚障害があるから特別な玩具というわけではなく、ブロックや折り紙等で指先を使う遊びを選んであげれば楽しめることを知ることができてよかった」という回答があった。

7月の話題提供に対しては、「視覚補助具のことはほとんど知らなかったので実際に見ることや使っている方のお話が聞けてよかったです」や「弱視シミュレーションゴーグルの体験が印象に残っています。視覚障害を身近に感じることができました。」、そして、

「小・中・高校と段階を追って話していただいたので自分の子どもと重ね合わせながら考えるきっかけになりました。思春期になって補助具が使えなくなることがあるかもしれないけど、今は補助具を使っている姿が格好良いんだということを日々伝えながら使わせています」という回答があった。

8月の個別相談会では、「個別に発達について相談にのってもらえたことがよかったです」や「弱視学級についての情報を知ることができてよかったです」、そして、「発達を促す教材を紹介してもらえてよかったです」という回答があった。

9月の話題提供に対しては、「実際に子育てをされたお母さんからの話はとても参考になりました」、「障害児と障害のない兄弟を育てるにあたりどのように接したらよいか示唆を得ることができました」、「親がなんでも先回りしてやらないことも大切なのだ我知道了」、「そして、「実際に育ててこられたお母さんの話を聞くことができたのですごく良かった。普段は将来の不安や心配することが多いのですが、大変なこともあるけれど親がそこまで心配しなくてもなんとかなるのかなあ～とも思えるような気がしました」という回答があった。

10月の話題提供に対しては、「目が悪いという言い方を、見えにくいなどと変えるように意識するようになりました」や「自分の子どもに視覚障害があることを親がちゃんと伝えることが大切なのだ分かりました。障害は隠すものではなく、出来ないことは助けて貰える環境を作ることが重要だと思いました」という回答があった他、「どれくらいの視力ならこれくらいの文字が見えているという表を印刷して配布していただいたので非常に分かりやすかったです。また、まぶしいとどのように見えにくいのかも分かりやすく説明していただいたので今後、自分の子どもの障害について他の人に説明しないといけない場合には参考にさせていただきたいと思いました。普段障害があることを隠しがちですが必要な場合には正しく伝えて、理解してもらうことも重要だと感じました。全体的に内容も説明方法も分かりやすく、役に立つお話でした」という回答があった。

パパママ会の話題提供については、毎回、障害の状態も成育歴も異なる当事者が、専門家という立場ではなく、ひとりの視覚障害者としてのライフストーリーを振り返りながら話題を提供しているが、参加した家族にとっては、子育てをする上で学べるものがあるということが確認された。

Table1 参加者のプロフィール

参加者	眼疾名	年齢	視力	視野	手帳	在籍環境	所要時間	交通費	託児
1	緑内障	2:2	0.03	測定経験無	無	在宅	~60分	1,500円以内	必要
2	眼白子症	9:10	0.4	測定経験無	有	地域の小学校	120分~	1,500円以内	必要
3	小眼球症	1:7	0	視野障害無	有	在宅	~30分	500円以内	必要
4	小眼球症	6:4	0.02	視野狭窄	無	盲学校	~60分	1,000円以内	必要
5	ピーターズ奇形	3:3	0.03	測定経験無	有	在宅	~60分	500円以内	必要
	ピーターズ奇形	1:10	光覚	測定経験無	無	在宅	~60分	500円以内	必要
6	コーツ病	6:2	0.05	測定経験無	有	幼稚園	~60分	500円以内	必要
7	角膜内皮虹彩症候群	9:11	0.02	測定経験無	有	盲学校	~60分	500円以内	必要
8	眼白子症	2:9	0.4	測定経験無	無	在宅	~90分	1,000円以内	必要
9	緑内障	2:0	0.07	測定経験無	有	在宅	~90分	1,500円以内	必要
10	未熟児網膜症	6:0	0.3	視野狭窄	無	在宅	~60分	1,000円以内	必要
11	FEVR	6:10	0.05	視野障害無	有	幼稚園	~60分	1,500円以内	必要

※視力は矯正でよい眼の数値を記載。  
 ※年齢は質問紙回収時点で、歳:月齢と示した。  
 ※手帳の有無は身体障害者手帳を示す。  
 ※所要時間及び交通費は自宅から盲学校までとした。

Table2 参加者の満足度について

実施月	テーマ	人数	満足度				
			100%	80%	60%	40%	20%
6月	タイ在住の全盲女性のお話	8	4	3	1	0	0
7月	視覚補助具に関するお話	11	7	3	1	0	0
8月	個別相談会	6	6	0	0	0	0
9月	親の関わり方に関するお話	11	10	1	0	0	0
9月	個別相談会	5	5	0	0	0	0
10月	障がいの伝え方に関するお話	12	11	1	0	0	0

※人数は回答者人数。

Table3 興味のある話題提供の順位

テーマ	1位	2位	3位
自分の子どもと同じ眼疾患の人の話	8件	4件	1件
全盲の人の話	3件	0件	0件
弱視学級で教育を受けた人の話	2件	3件	4件
盲学校に幼稚部から高等部まで在籍していた人の話	1件	5件	0件
弱視の人の話	0件	2件	2件
地元愛知県で活躍する視覚障がい当事者の話	0件	1件	8件
スポーツ系の話題 (パラリンピック選手等からのお話)	0件	0件	0件

#### (4) 参加者にとってのパパママ会の意義

パパママ会の活動のよいところについて、自由記述で尋ねた回答の代表意見をまとめたところ、「当事者のお話を聞く機会がほとんどないので毎回とても貴重なお話を聞くことができます」、「視覚障害の子どもを持つ親同士が話せるところ」、「質疑応答の時間にほかの方の質問されたことで自分も同じ悩みがあるなと共感したり、新たな情報を知ることができること

ろ」、「私もそうでしたが、子どもが小さければ小さいほど悩みは大きくなります。そんなとき、こういう活動があると悩みを共有できたり、相談できたりしてとてもよい場だと感じています。ここで情報を得られたことで子どもが将来色々な選択肢の中で生きていくことができることを知れて、また、将来、お話いただいた当事者の方々に子どもが相談できるようになったらよいなと感じています」、「異年齢のご家族とも交流が

できたり、盲学校在籍の保護者の方とお話ができたりすることがとてもためになっています」等の回答があった。いずれも異年齢や異なる環境の家族同士の交流の意義を示した内容であった。

#### (5) 興味のある話題

今後、パパママ会で取り上げてほしい話題提供については、Table3のように順位がつけられた。

それによると、興味のある話題1位は「同じ眼疾患のある人の話」8件、「全盲の人の話」3件、「弱視学級で教育を受けた人の話」2件、「盲学校で幼稚部から高等部まで教育を受けた人の話」1件となっていた。「地元愛知県で活躍する視覚障がい当事者の話」は3位8件となっていた。「弱視」や「全盲」という分け方ではなく、同じ眼疾患をもつ当事者がどのように生活をしているのかが最も関心があることが示唆された。網膜色素変性症は、その患者数の多さや病気が進行性であることなどから患者会が組織的に活動している。しかし、網膜色素変性症のように各地域に組織がある眼疾患はほとんどないため、主な情報収集手段は眼科とインターネット上の情報となっている。今回の調査結果に基づき、同じ眼疾患の当事者からの話題提供を取り入れた取り組みの必要性が示された。

## 2. 活動が盲学校教員に及ぼす効果

ここでは、パパママ会の活動に参加した盲学校教員5名に行った面接調査から得られた回答を報告し、要点をまとめる。

#### (1) 印象的だった話題提供について

印象的であった話題提供については、「特定の話題提供が特によかったというより、当事者からの経験談を聞く機会が少ないため、どの話題提供も新鮮で印象的な内容であった」(2件)、「毎回、とても学びが多い。特に、障害とどのように向き合っているのかや先天性の弱視の方が自分の見え方をどのように理解していったのか、そのプロセスを知ることができてよかった」(1件)、「毎回、様々な職業の方がお話してくださるので、こんなに視覚障害があってもできる仕事があるのかと新鮮に感じています」(1件)という回答があった。

一方で、「成人した当事者の話が多いので、直接的に乳幼児に結びつかないように感じた(1件)」といった回答もあった。

#### (2) 印象的だった出来事について

活動を通じて印象に残った出来事についてみると、「質疑応答の場面で、盲学校在籍の保護者から質問がでていて、こういう場だから相談しやすいのだろうと感じ、いつもとは違う保護者の悩みを聞く機会になってよかった」(1件)、「視覚障害のある子どもを持つ親同士がつながる場になっていると感じました。会が終わったあとに連絡先を交換している場面もみられ

て、ママ友ができるのはとてもよいことだと思います」(1件)、「この相談会で知った講師から直接話を聞く機会を盲学校で設定することは難しいと思うので、viwa等の当事者団体との連携をしながら、継続的にこのような機会を提供できるようにしたい」(3件)、「参加された保護者の方々が熱心にメモをとったり、質問したりしている姿が印象的であり、盲学校にはこういう情報提供が求められているのだろうという示唆を得た」(1件)等の回答があった。

全国各地で活躍する視覚障害当事者の話を聞くことは、盲学校教員にとっても有意義な機会となっていることが示唆された。

#### (3) 盲学校と当事者団体との連携

当事者団体と盲学校の連携については、「実際に参加してみて、保護者のためになっている活動だと感じたため、学校全体でサポートできたらよいと思っている」(3件)、「盲学校在籍する児童生徒やそのご家族にも参加できる機会を提供したい」(1件)、「より多くの教職員がこの活動に参加できるようになるとよいと感じる」(1件)という回答があった。全体的に連携に意欲的な回答であった。

一方で、連携に対する問題や課題も回答されており、「本年度は、幼・小学部の教員が中心となり連携してきたが、今後の運営方法について検討していきたい」(2件)、「パパママ会の活動内容についての理解啓発をさらに進めていく必要がある」(1件)、「人手不足ということだったので、活動に無理して参加したことがある」(1件)、「託児に関わる安全の確保や事故発生時の対策の検討が必要」(1件)が報告された。

連携に関して、参加した家族への効果を感じるため積極的に行いたいという気持ちはあるものの、盲学校として外部機関との連携をどのような形で進めていくのがよいのかを検討する必要性が指摘された。特に、授業日以外でのセンター的機能の在り方の検討の必要性が挙げられた。

#### (4) 土曜日の活動実施について

土曜日に活動を実施することについては、「土曜日に実施すると、参加できる教員に限られるため平日にやってもらいたい」(1件)、「土曜日だけではなく、日曜日や平日等、多様な実施日時があると多様なニーズに応じることができるのではないか」(1件)、「平日に教育相談として活動を設定したほうがよい」(1件)、「土曜日にすることでお母さんだけではなく、お父さんや兄弟等、家族全員で参加できるイベントになっているところがとても魅力的に感じる。一方で、学校休業日の活動は、教員に負担が生じるため、平日の方がよいかと思う」(1件)等の回答があった。

障害児を育てる上で必要な教育や医療を受けるため、障害児を育てる母親は厳しい就労環境を強いられている(江尻, 2014)。佐藤(2015)は、オランダに

において乳幼児を持つ父母のワーク・ライフ・バランスは大きな偏りなくバランスが保つことができている一方で、日本は母親に育児負担が偏る傾向にあることを指摘している。父親が育児に参加するためには、父親の休日に支援活動が行われる必要があるが、教員が積極的に活動するためには、土曜日等の学校休業日に支援活動を行うことが難しい状況にあることが本調査から明らかにされた。参加家族からのニーズを踏まえて、今後、盲学校の支援体制をどのように構築していくかが課題といえよう。

#### IV. まとめ

本調査を通じて、パパママ会に参加した家族、及び、盲学校教員それぞれに対して、一定の効果があることが示された。これにより、継続的な活動として位置づける必要性が確認された。今後の活動を計画するにあたっては、参加家族から得られた満足度に関する結果や興味のあるテーマを参考に、より参加家族のニーズに応じることのできる活動の展開が期待される。また、活動を実施する上で重要となる盲学校との連携について、本調査で挙げられた課題を一つずつ解決をし、よりよい連携の仕組みを模索し、持続可能な活動にすることが今後の課題であろう。

#### 引用文献

- 江口万祐子・杉谷邦子・相馬睦・筑田眞 (2014) 獨協医科大学越谷病院における小児のロービジョンケア. 眼科臨床紀要, 7 (8), 592-596.
- 江尻桂子 (2014) 障害児の母親における就労の現状と課題—国内外の研究動向と展望—. 特殊教育学研究, 51 (5), 431-440.
- 遠藤勉 (2003) 教育相談として盲学校における特別支援の在り方について—埼玉県立盲学校の取り組みを中心に—. 弱視教育, 41 (3), 17-20.
- Golembiewski, D. & Moisey, S (1900) Fostering Self-Help at a Distance for Adults with Visual Impairments. Journal of Visual Impairment & Blindness, 96-98.
- 井上順治・鶴岡三恵子・堀貞夫・井上賢治 (2014) 眼科病院における視覚障害による身体障害者手帳の申請者の現況 (2012年): 過去の調査との比較. 眼科臨床紀要, 7 (7), 515-520.
- 伊藤良子 (2010) 「障害児の母親へのケア」に関する文献展望とその分類. 京都市立看護短期大学紀要, 35, 67-76.
- Dote-Kwan, J. (1995) Impact of Mothers' Interactions on the Development of Their Young Visually Impaired Children. Journal of Visual

Impairment & Blindness, 46-58.

- 神田英治 (1999) 盲学校における早期教育相談の現状と課題—機関連携に基づく地域支援のための教育相談ネットワーク確立の試み—. 情緒障害教育研究紀要, 18, 56-62.
- 文部科学省 (2005) 特別支援教育を推進するための制度の在り方について (答申). 2005年12月8日 <[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/05120801.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/05120801.htm)> (2017年1月12日)
- 奈良里紗・佐藤由希恵・岩池優希・加藤芳子・上杉相良 (2016) 名古屋盲学校と当事者家族支援団体が連携した視覚障がい乳幼児保護者支援の取組. 第38回視覚障がい乳幼児研究大会横浜大会, 25.
- 沖本誠司 (2010) 本校[福岡県立福岡視覚特別支援学校]のセンター的機能の実際—親子教室「さくらんぼ」教室の取り組みを中心に—. 弱視教育, 48 (2), 25-31.
- 佐藤淑子 (2015) ワーク・ライフ・バランスと乳幼児を持つ父母の育児行動と育児感情—日本とオランダの比較—. 教育心理学研究, 63, 345-358.
- 鈴木あかね・植松照子・大野修郎・白倉明美・中村儀子・酒井弘充 (2000) 山梨県立盲学校における弱視教育相談室と外部機関との連携について. 弱視教育, 38 (2), 4-10.
- 高瀬京子・吉田道広 (2006) 熊本県立盲学校地域支援部の取り組み. 弱視教育, 44 (1), 44-47.
- 外山正一 (2000) 北海道旭川盲学校における教育相談の現状と課題—通級のかたちをとった教育相談の事例から—. 弱視教育, 38 (2), 1-3.

#### 付記

パパママ会の活動は視覚障がい乳幼児研究会地域研修会助成金により実施された。活動へのご理解・ご支援を賜った視覚障がい乳幼児研究会の皆様へ感謝の意を表す。

また、活動の運営にあたっては、愛知教育大学相羽研究室の協力のもと、相羽先生をはじめ障害児教育講座の学生にもサポートして頂いた。また、本活動は、愛知県立名古屋盲学校の職員の皆様にも運営を協力して頂いた。この場を借りて、改めて御礼申し上げる。

最後に、本調査にご協力頂いたご家族の皆様並びに盲学校の先生方に深く感謝申し上げます。

なお、本論文は筆頭著者の奈良が本文を執筆し、表作成等のレイアウト調整を岩池が、最終的な文章の編集を相羽が行った。